東京都大田区立大森東小学校の体験活動について

1　大森東小学校の体験活動

(1)　「米作り」を通した豊かな体験

①　「米作り」の背景とそのねらい

ア　背　景

・身近な環境としての学校田の活用を図る。

・学校全体で取り組むことができる活動を取り上げる。

イ　ねらい

・長期間に渡って取り組む活動を通して、周囲の自然に目を向け、環境について考える契機とする。

・米作りを通して農業という職業について考えるきっかけをつくる。

②　教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間」に、主となる学習として位置付けた。以下は各学年の授業時数と主な内容である。

学年	体験活動の種類･内容	期間･日数･単位時間数	教育課程上の位置付け
６年	・自然にかかわる体験活動 ・勤労生産にかかわる体験活動	４月　４時間 ７～９月　８時間 １１月　２時間 （日数１２日）	総合的な学習の時間
５年	・自然にかかわる体験活動 ・勤労生産にかかわる体験活動	４月～１１月 ５０時間 （日数４０日）	総合的な学習の時間 （３５時間） 社会科（１５時間）
４年	・自然にかかわる体験活動 ・勤労生産にかかわる体験活動	７月 １１月 １５時間 （日数１０日）	総合的な学習の時間 （８時間） 理科（７時間）
３年	・自然にかかわる体験活動 ・勤労生産にかかわる体験活動	６月 １１月 １０時間 （日数７日）	総合的な学習の時間

③　活動の概要

ア　「米作り」の主な活動内容

＜月＞	＜主　な　作　業＞	＜学年＞
４月	田おこし、元肥、代かき	６年
５月	田植え、農家の仕事の学習、水管理	５年

６月	水管理、稲の成長観察	３年
７月	草取り、水管理、稲の成長観察、網かけ	４年、５年
８月	草取り、稲の成長観察、水管理	４年
９月	水管理	４年
	案山子づくり	６年
	稲刈り、稲干し	５年
１０月	脱穀、精米	５年
１１月	収穫祭	全校

イ　教員の役割

現在本校の周囲には集合住宅が並び、川を隔てては、工場が建っているという状況で、田んぼは全くない。

この環境で米作りを本格的に指導するために、現職の農業従事者に来校してもらい、米作りの知識や技能だけではなく、米作りにかける思いを子どもたちに知らせるべきだと考えた。そこで、茨城県在住の方に定期的に来校を願い、直接指導を受けた。

また、農家の方に直接指導をしていただけるのは、限られた日数となるため、教員が夏季休業中に、茨城県へ出張し、農業研修を受け、児童の米作りを支援することにした。

こうした児童も教員も共に学ぶ姿勢が、生業としての農業を深く知る手掛かりとなり、体験を通して深く学習するきっかけとなった。

ウ　外部指導員の役割

農業普及員の方に外部指導員を依頼し、積極的に米作りのための指導を受けた。専門的・経験的な知識の指導がきめ細かく行われたため、農業に従事する意気込みも児童や教員に伝わっていった。

米を大切にすることが自分の仕事に対する誇りの表れであることを指導の中で見せていただいた。このことが、米作りを通した豊かな体験活動の鍵となった。

④　小学生にとっての体験活動と職業観

米作りは、児童に米という食べ物の生育過程を知らせるとともに、農業という職業を理解させることで、将来の職業について考える機会となった。いくつかの職業を知ることも大切だが、一つの職業について深く知ることも意義あることとの考えから自立・生き方についての指導を実施している。

⑤　活動の評価方法について

米作りについては、活動のまとまりごとに自己評価表の記入をしている。

今年度は、気象の変化と米作りとの関係に対する児童の気付きや、成長する稲の様子から新たに出てきた疑問等を自己評価表に記入した。また一方では、指導内容の改善や工夫の手掛かりとなっている。今後は、児童への働きかけの一つとしてこの表の改善をしていく必要を感じている。

⑥　推進校としての課題

現在、第３学年から第６学年の児童が、何らかの形で学校田にかかわる活動を実施している。４年間の中で異学年の児童が稲を育てるための準備を分担して、第５学年の米作りは成り立っている。この息の長い取組みを通して、児童の中に、収穫した米に対する思い入れが深く残るのである。今後、４年間に渡る取組みを続けるためには、各学年での取組みを再度見直し、第５学年での長期の取組みに向けて、学年ごとの学習で育てた力を結集できるように配慮する必要がある。また、第６学年では、米作りで培った力を十分に発揮

できるような活動を考えていくことが課題である。

今後、体験活動での連携とともに、積極的に中学校・高等学校への情報発信や各学校での体験活動の情報収集を行うことが他の学校連携という視点からの課題である。

（２）異校種の学校との連携

都立大森東高等学校は、本校から徒歩 10 分程の距離にある。今年度から高等学校生徒が、小学校を訪ね、「総合的な学習の時間」のゲストティーチャーとして小学生に教える活動を始めた。自分の持つ知識や技能を小学生に教えることを通じて、高等学校生徒は伝える力を高め、児童は様々な人とのかかわりの中で学ぶ力を身に付けている。

また、大森東中学校も本校から徒歩 10 分程の距離にあり、今年度は本校六年生が大森東中学校へ行き、部活動の体験を行った。一方大森東中学校の生徒が本校を職場体験活動の場としており、連携を図っている。

（３）学校支援委員会の運営について

学校内の体制を整え、校内での活動についての希望や疑問点は、教頭や担当教諭が窓口となり取りまとめた。その上で支援委員会を開催した。ところが学校と支援者の方々の希望日程がうまく合わないことが度々起こったので、電話やファクシミリ等によるやりとりを密に行うとともに、支援委員会の方々に学校内での活動のねらいを十分に理解していただくようにした。その結果、支援委員の方々から積極的に学校での活動や児童への働きかけに助言等をいただき、推進校としての取組みに幅が出てきた。

２ 推進地域としての取組み

（１）中学校の職場体験活動について

昨年度は、職場体験活動推進地域として、区立中学校全校に職場体験活動についての意識や実施状況等を調査し、推進校の職場体験活動を通じて、生徒が得たものを発表会を通して全区立中学校に発信した。また、今年度は、大田区財団法人産業振興協会のホームページにそれぞれの中学校の職場体験の様子を掲載してもらい外部への情報発信を行っている。

（２）高等学校の取組み

都立大森東高等学校は、インターンシップを通して就労や職業観について考えを深める取組みを行っている。昨年度は、保育園や病院への実習を体験し、自分の将来の職業として、保育士あるい は福祉関係を目指し、関係の上級学校へ進学した生徒も出て、長期体験活動の成果が見られた。

今年度は大森東小学校への出前授業や近隣の児童館での琴や和太鼓の演奏、紙芝居やパネルシアター等の出前活動を行い、取組みの広がりを見せている。

（３）推進地域協議会について

小学校、中学校、高等学校のそれぞれで実施している体験活動を通じて、発達段階に即した指導や連携のあり方を探るため、協議会を実施している。この協議会では、それぞれの学校での実践を報告後、どのような連携が必要であるかについて協議するとともに、学校外の体験活動支援者の意見を集約し、地域として目指す方向性についても協議を進めている。

現在のところ、小学校では自然とかかわる豊かな体験活動を通して、中学校では地域における職場体験学習を通して､高等学校では生徒の選択によるインターンシップを通して、それぞれの校種における勤労体験学習を推進し、児童・生徒の生き方指導の充実を図っていきたいと考えている。

（４）推進地域としての成果

今年度の成果としては､中学校での職場体験活動の体験場所の確保という課題に対して、財団法人大田区産業振興協会のホームページへの掲載という形で大田区 28 校の中学校が共通の情報を得ることができた。また、大森東小学校と都立大森東高等学校との連携が実現し、小学校と高等学校との連携の姿を具体化することができた。

（５）推進地域としての課題

今のところ、それぞれの校種で、体験活動に力を注ぐことが中心となり、異校種間の連携をどう行うのかが明確にできていない。

大森東小学校での稲作体験では、農業に関する就労を体験することで、一つの職業を深く知ることができた。その体験から得た働くことの意味や重要性を、中学校での職場体験でさらに深めることができれば、高等学校でのインターンシップは将来の自立に向けた直接の就労体験と位置づけることができる。

しかし､小学校での体験が中学校での職業体験に結びつくためには､小学校における「総合的な学習の時間」の在り方が重要となってくる。「総合的な学習の時間」の年間計画を再検討すると同時に、「総合的な学習の時間」について理解し合い、ねらいを明確にして体験活動を行っていく必要がある。このことをきめ細かく行うことが課題である。また、地域や外部支援を有効に児童･生徒に還元するための工夫も考慮しなければならない。